地域唯一の中核病院・深川市立病院（左）と同病院内にある北空知地域医療介護連携支援センター

妹背牛町健康福祉課の河野和浩課長

退院調整・在宅生活支援部会長を務める河野和浩・妹背牛町健康福祉課長は「本来は各町が単独でやらなければならないこと。スタート時は（連携して取り組むことへの）イメージがつかめず、どこからどう進めていいか戸惑いましたが、少しずつ形になってきました」と言う。

多職種が顔合わせ 研修会で事例検討

成果として表れているもののうち、認知症初期集中支援事業については、当初、医療職や介護職らで構成するチームの中心となる認知症サポート医が深川市に1人だけしかいなかったが、協議会からの働きかけもあり、新たに6人が養成研修を修了し、現在は7人が対応。各市町で担当した事例は昨年度から開かれている事例共有検討会で報告されている。

「妻に対し暴力的行為があるアルツハイマー型認知症の夫の家族支援」の事例では、妻に物を投げつけるなどの行為があった家庭に医師、ケアマネ、訪問看護師らが関わったことで家の中が落ち着いた。地域リハビリテーション担当として関わった赤松充敏作業療法士（深川市立病院）は「夫の好きな手作業ができるデイサービスを提案し、今ではそこへ1日も休まずに楽しく通っています」と語る。

11月18日に開かれた入退院支援研修会では、いわゆる「8050問題」をテーマに、70代後半の女性（要支援2）と50歳の息子の2人暮らし世帯の5年後を想像し、グループワークでさまざまな意見を出しながら支援策を考えた。また、9月に開かれた多職種合同研修会「第2回ケア・カフェきたそらち」では、「お口の話」をテーマに、オーラルフレイルと予防について知識を深め、ケア・カフェ方式によるグループワークを行った。

桑原薫さん

これらの研修には毎回100人前後の参加があり、意見交換も活発。研修会で交わされた議論や感想は、協議会のホームページに写真とともに掲載され、その後の活動に生かされる。「協議会発足以前にも研修会は開いていましたが、講演などを聴いても、『この地域にはないものなのでできない』というマイナス発言が多かったのですが…」と話すのは、多職種連携・地域啓発部会副部会長の桑原薫さん（秩父別町、指定居宅介護支援事業所幸鐘会管理者・ケアマネジャー）。「多職種でグループワーク中心に研修を行ううち、自分たちでこんなこともできるんだ―という強みになっていきました」と変化を強調した。

入退院支援について情報・意見交換などが行われた研修会

「チーム北空知」で 地域包括ケア構築

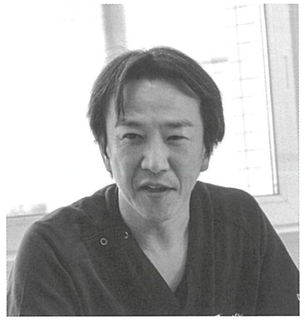
また、地域リハビリテーション活動支援事業は、リハ専門職が各市町の地域包括支援センターと連携し、高齢者の自立支援への取り組みや介護予防の強化などに関する事業をリハの視点で支援するもの。保健師やケアマネと一緒に訪問し、介護が必要な状態に陥らないよう、本人・家族と協議しながら、助言などを行っている。担当の赤松作業療法士は「ほかの職種の方と顔を合わせる機会も増え、連携しながら、本人のためになるサービス提供につながりつつあります」と話していた。

グループに分かれ盛んな事例検討などが行われた多職種合同研修会

地域で行われているリハビリテーション活動支援事業

介護に関しては各町独自の取り組みもある。妹背牛町では、町民で作る「わかち愛劇団」が毎年、1時間半ほどもある本格的な介護劇を上演している。この11月には7回目となる「子どもにでもわかる介護劇・きみといつまでも」が町民会館で上演された。認知症の高齢の夫と妻を軸に、家族のやり取りをリアルに、時にはユーモアを交えて描いた作品。会場には300人の観客が詰めかけた。

平成29年に深川市で開かれた協議会の住民フォーラムには、初の町外公演として介護劇が上演され、感動を持って迎えられた。河野健康福祉課長は「上演は町の一大イベントになっています。地域の多くの住民に在宅医療・介護を身近に感じ、考える一助になってほしい」と話していた。



赤松充敏さん

協議会が発足して4年。これまで、新しい資源を作るというより、今ある資源を維持・確保し、それをどう磨いていくかを最大の課題として取り組みを進めてきた。三ツ井事務局長は「北空知の地域医療・介護の関係者が『チーム北空知』になって、地域包括ケアシステムを構築したい。関係者が顔の見える関係を築き、大いに議論し、医療・介護サービスを持続的に提供できる地域づくりに取り組んで行くことができれば…」と話していた。

（写真の一部は北空知地域医療介護確保推進協議会から提供を受けました）

妹背牛町の町民劇団による介護劇の一場面＝令和元年11月